



Sun N1 Service Provisioning System ユーザーズガイド (Oracle Database Plug-In 3.0)



Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-6499-10
2006年4月

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

U.S. Government Rights Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品に含まれる HG-MinchoL、HG-MinchoL-Sun、HG-PMinchoL-Sun、HG-GothicB、HG-GothicB-Sun、および HG-PGothicB-Sun は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。HeiseiMin-W3H は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、docs.sun.com、および Java は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標、登録商標もしくは、サービスマークです。

サンのロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、および Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

Wnn は、京都大学、株式会社アステック、オムロン株式会社で共同開発されたソフトウェアです。

Wnn6 は、オムロン株式会社、オムロンソフトウェア株式会社で共同開発されたソフトウェアです。Copyright OMRON Co., Ltd. 1995-2000. All Rights Reserved. © Copyright OMRON SOFTWARE Co., Ltd. 1995-2002 All Rights Reserved. ©

「ATOK」は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。

「ATOK Server/ATOK12」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK Server/ATOK12」にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれる郵便番号辞書(7桁/5桁)は日本郵政公社が公開したデータを元に制作された物です(一部データの加工を行っています)。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれるフェイスマーク辞書は、株式会社ビレッジセンターの許諾のもと、同社が発行する『インターネット・パソコン通信フェイスマークガイド』に添付のものを使用しています。

Unicode は、Unicode, Inc. の商標です。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPENLOOK のグラフィカル・ユーザインタフェースを実装するか、またはその他の方法で米国 Sun Microsystems 社との書面によるライセンス契約を遵守する、米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法(外為法)に定められる戦略物資等(貨物または役務)に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Sun N1 Service Provisioning System User's Guide for Oracle Database Plug-In 3.0

Part No: 819-4459-10

目次

はじめに	5
1 Oracle データベースプラグインの概要	9
Oracle データベースプラグインの目的	9
Oracle データベースプラグインに含まれるもの	10
Oracle データベースプラグインを使用するための要件	10
Oracle データベースソフトウェアに関するそのほかの情報	11
2 Oracle データベースプラグインのリリースノート	13
インストール上の問題	13
Linux プランでの Oracle 9i のアンインストールが失敗する (6227857)	13
実行時の問題	13
3 Oracle データベースプラグインのインストールと構成	15
Oracle データベースプラグインの入手	15
Solaris への Oracle データベースプラグインの追加	16
▼ Solaris 用の Oracle データベースプラグインパッケージを追加する	16
Linux への Oracle データベースプラグインの追加	16
▼ Linux 用の Oracle データベースプラグインパッケージを追加する	17
Windows への Oracle データベースプラグインの追加	17
▼ Windows 用の Oracle データベースプラグイン MSI ファイルを追加する	17
N1 SPS への Oracle データベースプラグインの追加	18
▼ ブラウザインタフェースを使用して Oracle データベースプラグインをインポートする	18
▼ CLI を使用して Oracle データベースプラグインをインポートする	19
アップグレード後の Oracle データベースプラグインの新機能の有効化	19
▼ アップグレード後に Oracle データベースプラグインの新機能を有効にする	20
環境に応じたソリューションのカスタマイズ	20

リモートエージェントに関する要件	20
Linux システム用の共有メモリーとセマフォの設定	22
Solaris システム用の共有メモリーとセマフォの設定	22
SPARC システム上で動作する Oracle 9i 用の Solaris パッチ	23
Oracle データベースプラグインへのパッチの適用	23
4 Oracle データベースプラグインの使用法	25
Oracle データベースプラグインプロセスの概要	25
Oracle サポートスクリプト	26
Oracle ユーザーおよびグループ	26
Oracle シングルインスタンスソフトウェア	27
▼ セッション変数を設定する	27
▼ Oracle Database 10g 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをインストールする	27
▼ Oracle Database 9i 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをインストールする	31
▼ Oracle Database 10g 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをアンインストールする	35
▼ Oracle Database 9i 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをアンインストールする	36
データベースの作成と使用	37
データベースについて	37
▼ Oracle 9i データベースを作成する	37
▼ Oracle 10g データベースを作成する	38
同じホストで Oracle 9i と 10g を使用する方法	39
データベースの管理	39
▼ Oracle データベースを起動する	40
▼ Oracle データベースを停止する	40
▼ Oracle データベースの実行を確認する	41
▼ Oracle データベースのリモートエージェントに関する情報を表示する	42
コンポーネント	43
OraSpt コンポーネント	43
SingleInst コンポーネント	43
障害追跡	44
索引	45

はじめに

このマニュアルでは、N1™ Service Provisioning System (N1 SPS) ソフトウェアを使用して Oracle データベース アプリケーションおよびファイルの取得と配備を行う方法を説明します。

対象読者

このマニュアルの主な対象読者は、N1 SPS ソフトウェアに Oracle データベースの機能を組み込む N1 SPS ソフトウェアのシステム管理者やオペレータなどです。これらのユーザーには次の知識が必要とされます。

- N1 SPS 製品
- 標準的な UNIX® および Microsoft Windows のコマンドとユーティリティー
- Oracle データベース製品の一般的な概念と管理機能

お読みになる前に

N1 SPS ソフトウェアの使用について十分な知識がない場合は、次のマニュアルをご覧ください。

- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』
- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』
- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 リリースノート』

マニュアルの構成

第 1 章では、プラグインソリューションの概念を説明します。

第 2 章では、このプラグインに関する最新のニュースと既知の問題について説明します。

第 3 章では、プラグインのインストールと構成方法について説明します。

第 4 章では、このプラグインを通してアプリケーションやファイルの入手と配備を行う方法を説明し、プラグインで提供される特定のコンポーネントタイプについて示します。

Sun 以外の Web サイト

このマニュアルで参照している Sun 以外の URL は、追加の関連情報を提供します。

注 - このマニュアル内で引用する Sun 以外の Web サイトの可用性については、Sun は責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関して一切の責任を負いません。こうしたサイトやリソース上で、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことに伴って発生した (あるいは発生したと主張される) 実際の (あるいは主張される) 損害や損失についても、Sun は一切の責任を負いません。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun の Web サイトでは、以下の追加情報を提供しています。

- マニュアル (<http://jp.sun.com/documentation/>)
- サポート (<http://jp.sun.com/support/>)
- トレーニング (<http://jp.sun.com/training/>)

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用しません。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
<i>AaBbCc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm filename と入力します。

表 P-1 表記上の規則 (続き)

字体または記号	意味	例
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第5章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

◆ ◆ ◆ 第 1 章

Oracle データベースプラグインの概要

この章では、Sun N1 Service Provisioning System (N1 SPS) を使用した Oracle データベースソフトウェアのプロビジョニングに関する一般的な情報について説明します。

この章では、次の内容について説明します。

- 9 ページの「Oracle データベースプラグインの目的」
- 10 ページの「Oracle データベースプラグインに含まれるもの」
- 10 ページの「Oracle データベースプラグインを使用するための要件」
- 11 ページの「Oracle データベースソフトウェアに関するその他の情報」

Oracle データベースプラグインの目的

N1 SPS ソフトウェアは、Oracle 9i および 10g データベースソフトウェアを即座に使用できるようにする高度な機能を備えています。そのため、ユーザーは Oracle データベースソフトウェアおよびデータベースを簡単にプロビジョニングできます。Oracle データベースサポートは、N1 SPS 環境にロードされる Java™ Archive (JAR) ファイルを含んだ、プラットフォーム固有のパッケージから提供されます。Oracle データベースプラグインは、企業全体に Oracle 9i および 10g データベースソフトウェアを配備するプロセスを単純化します。

注 - Oracle データベースプラグインのこのリリースは、シングルインスタンス環境の Oracle データベースソフトウェアだけをサポートしています。Oracle RAC (Real Application Clusters) のサポートは含まれていません。

Oracle データベースプラグインに含まれるもの

Oracle データベースプラグインでは、主な機能として次のことができます。

- Oracle データベース構成の作成に必要なサポートスクリプトをインストールする。
- Oracle データベースソフトウェアを会社全体にインストールする。
- Oracle データベースを作成する。
- Oracle データベースを起動する。
- Oracle データベースを停止する。
- リモートエージェントで Oracle データベースが実行されていることを確認する。
- Oracle データベースソフトウェアがインストールされているすべてのリモートエージェントを表示する。
- 特定のリモートエージェントから Oracle データベースソフトウェアをアンインストールする。

Oracle データベースプラグインを使用するための要件

Oracle データベースプラグインは、Linux や Solaris™ システムで動作する Oracle 9i および Oracle 10g データベースソフトウェアをサポートします。Oracle データベースソフトウェアの使用に伴う要件の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。プラグインを使用するためには、そのほかに次の要件を満たす必要があります。

- Oracle 9i Release 2 または 10g Release 1 Database ソフトウェアのコピーが、ライセンスされた正当なものである。
- N1 SPS 環境がインストールされている。
- Oracle データベースソフトウェアを次のいずれかの構成で実行することになっている。
 - Oracle 10g Release 1 データベース (Redhat Linux AS 3.0)
 - Oracle 10g Release 1 データベース (Redhat Linux AS 2.1)
 - Oracle 10g Release 1 データベース (SPARC または x86 用の Solaris 10)
 - Oracle 10g Release 1 データベース (SPARC または x86 用の Solaris 9)
 - Oracle 10g Release 1 データベース (SPARC 用の Solaris 8)
 - Oracle 9i Release 2 データベース (Redhat Linux AS 3.0)
 - Oracle 9i Release 2 データベース (Redhat Linux AS 2.1)
 - Oracle 9i Release 2 データベース (SPARC 用の Solaris 9)
 - Oracle 9i Release 2 データベース (SPARC 用の Solaris 8)

Oracle データベースソフトウェアに関するそのほかの情報

プラグインを使用するためには、Oracle データベースソフトウェアの知識が必要です。この製品に関するそのほかの情報については、次の Oracle 情報を参照してください。

- General Information about Oracle Database (<http://www.oracle.com/database/index.html>)
- Documentation for Oracle Database 9i (<http://www.oracle.com/technology/documentation/oracle9i.html>)
- Documentation for Oracle Database 10g (<http://www.oracle.com/technology/documentation/database10g.html>)

Oracle データベースプラグインのリリースノート

この章では、Oracle データベースプラグインの最新情報、および既知の問題について説明します。

- [13 ページの「インストール上の問題」](#)
- [13 ページの「実行時の問題」](#)

インストール上の問題

Oracle データベースプラグインのインストール時の問題として次のものがあります。

Linux プランでの Oracle 9i のアンインストールが失敗する (6227857)

RedHat Linux システムで Oracle 9i 用のアンインストールプランを実行すると、次のエラーメッセージが表示されます。

```
"unexpected signal 11" (SIGSEGV) in /lib/ld-linux.so.2 during the call to the Oracle Universal Installer with the options "-silent -deinstall".
```

回避策: 手動でファイルを削除します。

実行時の問題

実行時に起きることが判明している問題はありません。

Oracle データベースプラグインのインストールと構成

この章では、Oracle データベースプラグインをインストールして構成する方法について説明します。

この章では、次の内容について説明します。

- 15 ページの「Oracle データベースプラグインの入手」
- 18 ページの「N1 SPS への Oracle データベースプラグインの追加」
- 20 ページの「環境に応じたソリューションのカスタマイズ」
- 23 ページの「Oracle データベースプラグインへのパッチの適用」

Oracle データベースプラグインの入手

Oracle データベースプラグインを入手する手順は 2 段階に分かれます。はじめに Oracle データベースプラグイン JAR ファイルが含まれたパッケージをシステムに追加する必要があります。そのあとに Oracle データベースプラグイン JAR ファイルをインポートします。

Oracle データベースプラグインは、Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに対するプラグインとしてパッケージ化されています。Oracle データベースプラグイン用のプラグインファイルは、Sun N1 Service Provisioning System 5.2 DVD または [Sun Download Center](#) から入手できます。

パッケージファイルをシステムに追加すると、Oracle データベースプラグインは 2 種類の JAR ファイルからインポートできます。状況に応じて、適切なファイルを選択してください。

- Oracle 9i データベースプラグイン
 - Oracle 9i データベースプラグインをはじめてインポートする場合は、`com.sun.oracle9i_DB_3.0.jar` ファイルを選択します。
 - 旧バージョンの Oracle 9i データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、`com.sun.oracle9i_DB_2.0_3.0.jar` ファイルを選択します。
- Oracle 10g データベースプラグイン

- Oracle 10g データベースプラグインをはじめてインポートする場合は、`com.sun.oracle10g_DB_3.0.jar` ファイルを選択します。
 - 旧バージョンの Oracle 10g データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、`com.sun.oracle10g_DB_2.0_3.0.jar` ファイルを選択します。
1. JAR ファイルを含むファイルを追加します。
 - 16 ページの「Solaris への Oracle データベースプラグインの追加」
 - 16 ページの「Linux への Oracle データベースプラグインの追加」
 - 17 ページの「Windows への Oracle データベースプラグインの追加」
 2. JAR ファイルをインポートします。- 18 ページの「N1 SPS への Oracle データベースプラグインの追加」

Solaris への Oracle データベースプラグインの追加

Oracle データベースプラグインを含むパッケージは、2 種類あります。

- SUNWspsond には、Oracle 9i データベースプラグインが含まれています。
- SUNWspstod には、Oracle 10g データベースプラグインが含まれています。

プロビジョニングする Oracle データベースのバージョン用のパッケージを選択してください。

▼ Solaris 用の Oracle データベースプラグインパッケージを追加する

- 1 端末ウィンドウでスーパーユーザーになります。
- 2 プラグインパッケージを含むディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを入力し、Return キーを押します。

```
# pkgadd -d package_directory package_name
```

スタンドアロン用 JAR ファイルは `/opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.oracle9i_DB` または `/opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.oracle10g_DB` ディレクトリにあります。アップグレード用 JAR ファイルは `/opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.oracle9i_DB/Upgrade` または `/opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.oracle10g_DB/Upgrade` ディレクトリにあります。

Linux への Oracle データベースプラグインの追加

Oracle データベースプラグインを含むパッケージは、2 種類あります。

- `sun-spsond-3.0-1.noarch.rpm` には、Oracle 9i データベースプラグインが含まれています。
- `sun-spsotd-3.0-1.noarch.rpm` には、Oracle 10g データベースプラグインが含まれています。

プロビジョニングする Oracle データベースのバージョン用のパッケージを選択してください。

▼ Linux 用の Oracle データベースプラグインパッケージを追加する

- 1 端末ウィンドウでスーパーユーザーになります。
- 2 プラグインパッケージを含むディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを入力し、**Return** キーを押します。

```
# rpm -i package_directory package_name
```

スタンドアロン用 JAR ファイルは

/opt/sun/N1_Service_Provisioning_System/plugins/com.sun.oracle9i_DB または
/opt/sun/N1_Service_Provisioning_System/plugins/com.sun.oracle10g_DB ディレクトリ
にあります。アップグレード用 JAR ファイルは

/opt/sun/N1_Service_Provisioning_System/plugins/com.sun.oracle9i_DB/Upgrade または
/opt/sun/N1_Service_Provisioning_System/plugins/com.sun.oracle10g_DB/Upgrade
ディレクトリにあります。

Windows への Oracle データベースプラグインの追加

Oracle データベースプラグインを含む Microsoft Installer (MSI) パッケージファイルは、2 種類あります。

- sun-spsond-3.0.msi には、Oracle 9i データベースプラグインが含まれています。
- sun-spsotd-3.0.msi には、Oracle 10g データベースプラグインが含まれています。

プロビジョニングする Oracle データベースのバージョン用のパッケージを選択してください。

▼ Windows 用の Oracle データベースプラグイン MSI ファイルを追加する

- 1 プラグインパッケージファイルを含むディレクトリに移動します。
- 2 該当する msi ファイルをダブルクリックします。
 - **Oracle 9i** データベースプラグインをインストールするには、sun-spsond-3.0.msi ファイルをダブルクリックします。
 - **Oracle 10g** データベースプラグインをインストールするには、sun-spsotd-3.0.msi ファイルをダブルクリックします。

インストーラの GUI が起動されます。スタンドアロン用 JAR ファイルは C:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\com.sun.oracle9i_DB または C:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\plugins\com.sun.oracle10g_DB ディレクトリにあります。アップグレード用 JAR ファイルは C:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\com.sun.oracle9i_DB\Upgrade または C:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\com.sun.oracle10g_DB\Upgrade ディレクトリにあります。

N1 SPS への Oracle データベースプラグインの追加

ある特定のプラグインを N1 SPS 製品に認識させるには、そのプラグインをマスターサーバーにインポートする必要があります。旧バージョンの Oracle データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、新しいプラグインにアップグレードする必要があります。

▼ ブラウザインタフェースを使用して Oracle データベースプラグインをインポートする

プラグインをインポートまたはアップグレードするには、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の第 5 章「プラグインの管理」で詳しく説明されている手順に従います。

- 1 ブラウザインタフェースのメインウィンドウの「Administrative」セクションで、「Plug-ins」をクリックします。
- 2 「Plug-ins」ページの「Action」列で、「Import」をクリックします。
- 3 JAR ファイルをダウンロードした場所に移動します。
 - Oracle 9i データベースプラグイン
 - Oracle 9i データベースプラグインをはじめてインポートする場合は、com.sun.oracle9i_DB_3.0.jar ファイルを選択します。
 - 旧バージョンの Oracle 9i データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、com.sun.oracle9i_DB_2.0_3.0.jar ファイルを選択します。
 - Oracle 10g データベースプラグイン
 - Oracle 10g データベースプラグインをはじめてインポートする場合は、com.sun.oracle10g_DB_3.0.jar ファイルを選択します。
 - 旧バージョンの Oracle 10g データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、com.sun.oracle10g_DB_2.0_3.0.jar ファイルを選択します。

4 「Continue to Import」 ボタンをクリックします。

インポートが正常に終了すると、プラグインの詳細ページが開いて、そのプラグインが提供するオブジェクトが表示されます。

▼ CLI を使用して Oracle データベースプラグインをインポートする

コマンド行を使用して、プラグインをインポートすることもできます。

▶ CLI からプラグインファイルをインポートするには、次のように入力します。

```
% cr_cli -cmd plg.p.add -path plugin-filename -u username -p password
```

- Oracle 9i データベースプラグイン
 - Oracle 9i データベースプラグインをはじめてインポートする場合は、*plugin-filename* は `com.sun.oracle9i_DB_3.0.jar` になります。
 - 旧バージョンの Oracle 9i データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、*plugin-filename* は `com.sun.oracle9i_DB_2.0_3.0.jar` になります。
- Oracle 10g データベースプラグイン
 - Oracle 10g データベースプラグインをはじめてインポートする場合は、*plugin-filename* は `com.sun.oracle10g_DB_3.0.jar` になります。
 - 旧バージョンの Oracle 10g データベースプラグインがすでにインポートされている場合は、*plugin-filename* は `com.sun.oracle10g_DB_2.0_3.0.jar` になります。

アップグレード後の Oracle データベースプラグインの新機能の有効化

Oracle データベースプラグインを、version 3.0 にアップグレードした場合は、新しいプラグイン機能を有効にするための手順を実行する必要があります。この追加手順を実行すると、既存の Oracle データベースインスタンスに対して次の作業を実行できるようになります。

- データベースを起動する。
- データベースを停止する。
- データベースが動作していることを確認する。
- Oracle データベースソフトウェアがインストールされているすべてのリモートエージェントを表示する。

▼ アップグレード後に **Oracle** データベースプラグインの新機能を有効にする

- 1 **N1 SPS** ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、対象となる **Oracle** データベースエントリを選択します。
- 2 「**Oracle Database Common Tasks**」ページで「**Install**」をクリックします。
- 3 「**Plans Details**」ページで「**Run**」をクリックします。
- 4 **Oracle** サポートスクリプト用に使用する変数を選択します。
この変数の選択方法の詳細については、27 ページの「**Oracle シングルインスタンスソフトウェア**」を参照してください。
- 5 シングルインスタンスソフトウェア用に使用する変数を選択します。
この変数の選択方法の詳細については、27 ページの「**Oracle シングルインスタンスソフトウェア**」を参照してください。
- 6 ターゲットホストを選択するには、「**Plans Details Run**」ページの「**Target Host**」フィールドの次にある「**Select from List**」をクリックします。
- 7 「**Plan Variables**」セクションで、「**Plan Details Run**」ページの「**markOnly installation**」の横にあるチェックボックスを選択します。
- 8 ターゲットホストでプラグイン機能を完全にアップグレードするには、「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

環境に応じたソリューションのカスタマイズ

リモートエージェントに関する要件

Oracle データベースソフトウェアをプロビジョニングするには、その前にリモートエージェントで次の追加作業を実行する必要があります。

- 20 ページの「リモートエージェントでのユーザーロールの設定」
- 21 ページの「Oracle データベースソフトウェアを実行するための Solaris リモートエージェントの準備」

リモートエージェントでのユーザーロールの設定

プロビジョニングソフトウェアのリモートエージェント (RA) をインストールする場合は、RA が root として実行されるように設定してください。Oracle のインストールでは通

常、ユーザーとして `oracle` が使用されますが、インストールプロセスで生成されるスクリプトの中には `root` として実行されるものがあります。

Oracle データベースソフトウェアを実行するための Solaris リモートエージェントの準備

Solaris 8 OS を実行している RA で Oracle データベースソフトウェアを実行するには、そのシステムに `Xvfb` 仮想フレームバッファがインストールされていることを確認する必要があります。Solaris 9 および Solaris 10 OS では、`Xvfb` フレームバッファは `SUNWxwsv` パッケージに含まれています。Solaris 9 または Solaris 10 システムに `Xvfb` フレームバッファがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力して、システムに `SUNWxwsv` パッケージがインストールされているかどうかを確認します。

```
# pkginfo -l SUNWxwsv
  PKGINST:  SUNWxwsv
    NAME:  X Window System Virtual Servers
  CATEGORY:  system
    ARCH:  sparc
  VERSION:  6.6.2.7400,REV=0.2004.12.15
  BASEDIR:  /usr
  VENDOR:  Sun Microsystems, Inc.
    DESC:  X Window System Xvfb & Xnest Virtual Display Servers
  PSTAMP:  x10s20041215212124
  INSTDATE:  Nov 18 2005 17:24
  HOTLINE:  Please contact your local service provider
  STATUS:  completely installed
  FILES:
    4 installed pathnames
    2 shared pathnames
    2 directories
    2 executables
    3259 blocks used (approx)
```

Solaris 8 オペレーティング環境には、`Xvfb` フレームバッファは含まれていません。Solaris 8 リモートエージェントで Oracle データベースソフトウェアを実行できるようにするには、他社製の `Xvfb` バイナリを入手し、それをシステムにインストールしてください。次の手順は、`Xvfb` バイナリを Solaris 8 リモートエージェントで構成する方法を示しています。

▼ Solaris 8 リモートエージェントで `Xvfb` バイナリを構成する

1 他社製の `Xvfb` バイナリを入手します。

他社製の `Xvfb` バイナリは、オンラインでダウンロードできるものがあります。このようなバイナリは、Sun Microsystems, Inc. による提供、テスト、またはサポートが行われていません。`Xvfb` バイナリの使用には、すべてバイナリ提供元によるライセンス契約およびサポート条件が適用されます。

- 2 **Solaris 8** リモートエージェントに **Xvfb** バイナリをインストールします。
提供元から提供される手順に従って、**Xvfb** バイナリをインストールしてください。
- 3 リモートエージェントの `/usr/X11R6/bin` ディレクトリに移動します。

```
# cd /usr/X11R6/bin
```
- 4 `/usr/openwin/bin` ディレクトリに、**Xvfb** バイナリへのシンボリックリンクを作成します。

```
# ln -s Xvfb /usr/openwin/bin
```

Linux システム用の共有メモリーとセマフォ어의設定

Linux システムでは、次のセマフォ어と共有メモリーの設定が使用されます。

```
kernel.shmmax = 1073741824  
kernel.shmall = 536870912  
kernel.sem = 250 32000 100 128  
net.ipv4.ip_local_port_range = 32768 65000
```

注-これらの値はインストール時に設定されます。したがって、ユーザーが設定する必要はありません。

`kernel.shmmax` の実際の値は、ターゲットホストのメモリー量によって異なります。この値は、OraSpt プランによってその実行時に動的に調整されます。

Solaris システム用の共有メモリーとセマフォ어의設定

Solaris システムでは、Oracle データベースのマニュアルに従って、セマフォ어および共有メモリー設定を作成する必要があります。この値の設定後は、システムを再起動してから、Oracle データベースソフトウェアをインストールする必要があります。詳細については、<http://www.oracle.com> にある Oracle インストールマニュアルで、推奨されるシステム調整パラメータを参照してください。

SPARC システム上で動作する Oracle 9i 用の Solaris パッチ

Solaris SPARC システムで Oracle 9i を実行する場合は、[SunSolve web site](#) から 3 つの Solaris パッチをダウンロードし、システムにインストールする必要があります。

- 112785-45
- 112963-17
- 113096-03

注-パッチリストおよびパッチバージョンは、本マニュアルの発行後に変更されている可能性があります。Solaris システム上の Oracle に適用される最新パッチについては、[Oracle の web サイト](#)および [SunSolve \(http://sunsolve.sun.com\)](http://sunsolve.sun.com) を確認してください。

Oracle データベースプラグインへのパッチの適用

Oracle データベースプラグインに適用可能なパッチは、[SunSolve \(http://sunsolve.sun.com\)](#) サイトを確認します。パッチを適用するには、パッチの README ファイルの手順に従います。

◆ ◆ ◆ 第 4 章

Oracle データベースプラグインの使用法

Oracle データベースプラグインは、Oracle 9i および 10g のシングルインスタンスデータベースソフトウェアを使用して作業するための特定のコンポーネントと機能を提供します。この章では、次の内容について説明します。

- 25 ページの「Oracle データベースプラグインプロセスの概要」
- 26 ページの「Oracle サポートスクリプト」
- 27 ページの「Oracle シングルインスタンスソフトウェア」
- 37 ページの「データベースの作成と使用」
- 43 ページの「コンポーネント」
- 44 ページの「障害追跡」

Oracle データベースプラグインプロセスの概要

注 - このリリースの Oracle データベースプラグインは、シングルインスタンス環境の Oracle データベースソフトウェアだけをサポートしています。Oracle RAC (Real Application Clusters) のサポートは含まれていません。

Oracle データベースプラグインを使用するためには、いくつかの手順を行う必要があります。

1. 個別のノードで使用する Oracle データベースソフトウェアを購入します。
2. Oracle システムをインストールするディレクトリ構造を定義します。
3. 必要なバッチを Oracle Web サイトからダウンロードして適用します。

注-現時点では、次に示すリリースに適用される Oracle パッチが提供されています。

- Oracle 9i (Redhat Linux AS 3.0 システム用)
- Oracle 10g Release 1 (Solaris 10 システム用)

Oracle データベースソフトウェアへのパッチの適用の詳細については、<http://www.oracle.com> の Oracle データベースマニュアルを参照してください。

4. ターゲットの Oracle システムに適用するディレクトリ構造を定義します。
5. Oracle 9i の場合
 - sysPass セッション変数が設定されていなければなりません。
 - Oracle 9i ソフトウェアとサポートスクリプトをインストールします。詳細は、31 ページの「Oracle Database 9i 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをインストールする」を参照してください。
 - Oracle 9i データベースを作成します。詳細は、37 ページの「Oracle 9i データベースを作成する」を参照してください。
6. Oracle 10g の場合
 - sysPass セッション変数が設定されていなければなりません。
 - Oracle 10g ソフトウェアとサポートスクリプトをインストールします。詳細は、27 ページの「Oracle Database 10g 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをインストールする」を参照してください。
 - Oracle 10g データベースを作成します。詳細は、38 ページの「Oracle 10g データベースを作成する」を参照してください。

Oracle サポートスクリプト

Oracle サポートスクリプトでは主に、適切な Oracle ユーザーの作成を行い、次に Linux システムでは共有メモリーの定義と、セマフォ設定の作成などを行います。これらのスクリプトは OraSpt コンポーネントに含まれています。サポートスクリプトは、シングルインスタンスソフトウェアのインストール時にインストールされます。

Oracle ユーザーおよびグループ

OraSpt コンポーネントは1つの OS ユーザーと2つの OS グループを作成します。

- ユーザー: oracle
- グループ: oinstall
- グループ: dba

NIS または LDAP にグループが存在する場合、サポートスクリプトはグループ名に「n1」を付加します。したがって、グループ dba がすでに存在する場合は、ユーザー n1dba が作成されます。

Oracle シングルインスタンスソフトウェア

SingleInst コンポーネントは、シングルノード Oracle データベースソフトウェア用のファイルをカプセル化し、配備します。

▼ セッション変数を設定する

Oracle データベースインスタンスをインストールしたり、データベースを作成する前に、セッション変数 `sysPass` を設定する必要があります。この変数は、データベースユーザー `SYS` や `SYSTEM` のデフォルトパスワードとなります。

注-ここで定義するパスワードは、SQL*Plusの実行に使用するパスワードでもあります。

N1 SPS ブラウザインタフェースからセッション変数を設定する場合は、次のようにします。

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースのウィンドウ最上部にある「**Session Variables**」をクリックします。
- 2 「**Session Variable**」フィールドに `sysPass` と入力します。
- 3 「**Password**」列のボックスにチェックを入れます。
- 4 「**Value**」フィールドに、データベースユーザー `SYS` と `SYSTEM` に使用するパスワードを入力します。
パスワードは入力と同時に暗号化されます。
- 5 「**Action**」列の「**Create**」をクリックします。
- 6 パスワードの入力を求められたら、適切な N1 SPS のパスワードを指定します。

▼ Oracle Database 10g 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをインストールする

始める前に Oracle Database 10g ソフトウェアをプロビジョニングする前に、次の作業を実行する必要があります。

- Solaris 8 または 9 OS を実行しているリモートエージェントに Oracle ソフトウェアをプロビジョニングするには、リモートエージェントに Xvfb フレームバッファのバイナリをインストールする必要があります。詳細については、21 ページの「[Oracle データベースソフトウェアを実行するための Solaris リモートエージェントの準備](#)」を参照してください。

- Oracle Database 10g ソフトウェアにパッチを適用する場合は、データベースの作成前に適用する必要があります。Oracle 10g データベースプラグインがインストールされた Oracle Database 10g ソフトウェアには、パッチを適用できません。
- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで Oracle Database 10g を選択します。
 - 2 「Oracle Database 10g Common Tasks」ページで「Install」をクリックします。
 - 3 「Plans Details」ページで「Run」をクリックします。
 - 4 Oracle サポートスクリプト用に使用する変数を選択します。

注 - Oracle 10g データベースプラグインの初回インストール時には、default 以外の変数セットを作成する必要があります。

- 既存の変数セットを使用する場合は、「Plan Parameters」テーブルの OraSpt コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから名前を選択します。
- 新しい変数セットを作成する場合は、「Plan Parameters」テーブルの OraSpt コンポーネント行にある「Select from List」をクリックします。
 - a. 「Create Set」をクリックします。
 - b. 「Set Name」フィールドに変数セットの名前を入力します。
 - c. installPath 用のフィールドに、サポートスクリプトをインストールする場所を示すフルパスを入力します。
たとえば /var/tmp/Ora_Spt と入力します。

注 - installPath 変数の値は、/opt などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Solaris リモートエージェントで installPath 変数を opt に設定し、デフォルトのホームディレクトリ /opt/SUNWn1sps/agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは /opt/SUNWn1sps/agent/opt/ に配備されます。

- d. installerHome 用のフィールドに、Oracle ソフトウェアファイルの場所を示すフルパスを入力します。
たとえば /mnt/Ora10gR1 と入力します。
このパスは CD、または適切なファイルが格納されているほかの場所を示すことができます。Oracle 10g の場合、installerHome 変数はソフトウェア CD の最上位ディレクトリを示します。このディレクトリは、Disk1 ディレクトリの上に位置する親ディレクトリです。

- e. シングルインスタンスサポートファイルに対して、**racInstall** フィールドが FALSE に設定されているか確認します。
- f. 変数セットを保存します。
- g. 「**Plan Parameters**」テーブルの **OraSpt** コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから、上で保存した変数セットを選択します。

5 シングルインスタンスソフトウェア用に使用する変数を選択します。

- 既存の変数セットを使用する場合は、「**Plan Parameters**」テーブルの **SingleInst** コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから名前を選択します。
- 新しい変数セットを作成する場合は、「**Plan Parameters**」テーブルの **SingleInst** コンポーネント行にある「**Select from List**」をクリックします。
 - a. 「**Create Set**」をクリックします。
 - b. 変数セットの名前を入力します。
 - c. **installPath** 用のフィールドに、**Oracle** サイレント応答ファイルを格納する場所を示すフルパスを入力します。
たとえば `/var/tmp/Oracle10g` と入力します。

注 - **installPath** 変数の値は、`/opt` などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Solaris リモートエージェントで **installPath** 変数を `opt` に設定し、デフォルトのホームディレクトリ `/opt/SUNWn1sps/agent` でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは `/opt/SUNWn1sps/agent/opt/` に配備されます。

- d. **ORACLE_HOME_NAME** 用のデフォルト値が使用されるコンポーネントがこのホスト上にすでに存在する場合は、変数 **ORACLE_HOME_NAME** の値を定義します。

注 - 同じ物理ホストにインストールされている2つのコンポーネントが同じ **ORACLE_HOME_NAME** をもつことはできません。

- e. **installerHome** 用のフィールドに、**Oracle** ソフトウェアファイルの場所を示すフルパスを入力します。
たとえば `/mnt/Ora10gR1` と入力します。

このパスは CD、または適切なファイルが格納されているほかの場所を示すことができます。**installerHome** 変数はソフトウェアの最上位ディレクトリを示します。このディレクトリは、**Disk1** ディレクトリの上に位置する親ディレクトリです。

- f. **ORACLE_BASE** 用のフィールドに、**Oracle** ソフトウェアをインストールするルートディレクトリへのパスを入力します。
たとえば `/opt/app/oracle` と入力します。
- g. このホストで **Oracle** リスナーを実行する場合は、**crListener** の値を **TRUE** に設定します。

注-1つの物理ホストでは1つのOracleリスナーだけを実行することをお勧めします。

- h. **softGroup** 変数と **dbaGroup** 変数が正しいか確認します。
 - i. ターゲットホストで次のコマンドを入力します。 `id -a oracle`.
 - ii. **oracle** ユーザー用に作成したグループ名をメモします。
 - iii. これらのグループ名が **softGroup** または **dbaGroup** フィールドのデフォルト名と異なる場合は、これらの値を必要に応じて変更します。
- i. **oraPrflFile** が正しく設定されていることを確認します。
 - **Solaris** システムに **Oracle 10g** データベースをインストールする場合は、**oraPrflFile** 変数を **profile** に設定します。
 - **Linux** システムに **Oracle 10g** データベースをインストールする場合は、**oraPrflFile** 変数を **bash_profile** に設定します

注-**oraPrflFile** 変数の場合、環境ファイルは Bourne シェル、Korn シェル、または **bash** のプロファイルでなければなりません。C シェルはサポートされていません。

- j. **TOPLEVEL_COMPONENT** 変数が、インストールする **Oracle** のバージョンと完全に一致しているか確認します。
たとえば、**10.1.0.3.0** をインストールする場合には、**TOPLEVEL_COMPONENT** 変数の値をデフォルトの **10.1.0.2.0** から **10.1.0.3.0** に変更する必要があります。
- k. 必要に応じてほかの変数を変更します。
- l. 変数セットを保存します。
- m. 「**Plan Parameters**」 テーブルの **SingleInst** コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから、上で保存した変数セットを選択します。

- 6 ターゲットホストを選択するには、「Plans Details Run」ページの「Target Host」フィールドの次にある「Select from List」をクリックします。

注-このプラグインではこのコンポーネントをホストセットにインストールできますが、ホストセットは、シングルインスタンスインストールよりも RAC インストールの方が意味があるといえます。

- 7 必要に応じて、「Limit Overall Running Time of Plan」および「Limit Running Time of Native Calls」フィールドの値を修正します。
デフォルトでは、プランのタイムアウト値が 30 分に設定されています。古いハードウェア上でプランを実行している場合などは、プランが完了するまでに 30 分以上必要になることもあります。タイムアウト値を増やすには、「Limit Overall Running Time of Plan」および「Limit Running Time of Native Calls」フィールドの値を増やします。
- 8 ソフトウェアをインストールするには、「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ Oracle Database 9i 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをインストールする

始める前に Oracle Database 9i ソフトウェアをプロビジョニングする前に、次の作業を実行する必要があります。

- Solaris 8 または 9 OS を実行しているリモートエージェントに Oracle ソフトウェアをプロビジョニングするには、リモートエージェントに Xvfb フレームバッファのバイナリをインストールする必要があります。詳細については、21 ページの「Oracle データベースソフトウェアを実行するための Solaris リモートエージェントの準備」を参照してください。
 - Oracle Database 9i ソフトウェアにパッチを適用する場合は、データベースの作成前に適用する必要があります。Oracle 9i データベースプラグインのインストールされた Oracle Database 9i ソフトウェアには、パッチを適用できません。
- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで Oracle Database 9i を選択します。
 - 2 「Oracle Database 9i Common Tasks」ページで「Install」をクリックします。
 - 3 「Plans Details」ページで「Run」をクリックします。
 - 4 Oracle サポートスクリプト用に使用する変数を選択します。

注 - Oracle 9i データベースプラグインの初回インストール時には、default 以外の変数セットを作成する必要があります。

- 既存の変数セットを使用する場合は、「Plan Parameters」テーブルの OraSpt コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから名前を選択します。
- 新しい変数セットを作成する場合は、「Plan Parameters」テーブルの OraSpt コンポーネント行にある「Select from List」をクリックします。
 - a. 「Create Set」をクリックします。
 - b. 変数セットの名前を入力します。
 - c. installPath 用のフィールドに、サポートスクリプトをインストールする場所を示すフルパスを入力します。

たとえば /var/tmp/Ora_Spt と入力します。

注 - installPath 変数の値は、/opt などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Solaris リモートエージェントで installPath 変数を opt に設定し、デフォルトのホームディレクトリ /opt/SUNWn1sps/agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは /opt/SUNWn1sps/agent/opt/ に配備されます。

- d. installerHome 用のフィールドに、Oracle ソフトウェアファイルの場所を示すフルパスを入力します。

たとえば /mnt/Ora9iR2/3006854 と入力します。

installerHome 変数はソフトウェアの最上位ディレクトリを示します。このディレクトリは、Disk1 ディレクトリの上に位置する親ディレクトリです。Redhat Linux AS 3.0 用の Oracle 9i では、installerHome 変数は Oracle Patch No. 3006854 の格納されたディレクトリを指します。

注 - Oracle データベースプラグインは、インストール処理時の CD の入れ替えをサポートしていません。Oracle 9i は物理的に CD が 3 枚あるため、各 CD をそれぞれ 1 つの場所の Disk1、Disk2、Disk3 サブディレクトリにコピーし、すべての情報にアクセスできるようにする必要があります。

- e. Linux 上で Oracle 9i を実行する場合は、oracleRel 変数に 9iR2 を設定します。
- f. シングルインスタンスサポートファイルに対して、racInstall フィールドが FALSE に設定されているか確認します。

注 - Oracle データベースプラグインのこのリリースは、シングルインスタンス環境の Oracle データベースソフトウェアだけをサポートしています。Oracle RAC (Real Application Clusters) のサポートは含まれていません。したがって、racInstall 変数の値は FALSE のままでなければなりません。

- g. 変数セットを保存します。
- h. 「Plan Parameters」テーブルの OraSpt コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから、上で保存した変数セットを選択します。

5 シングルインスタンスソフトウェア用に使用する変数を選択します。

- 既存の変数セットを使用する場合は、「Plan Parameters」テーブルの SingleInst コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから名前を選択します。
- 新しい変数セットを作成する場合は、「Plan Parameters」テーブルの SingleInst コンポーネント行にある「Select from List」をクリックします。
 - a. 「Create Set」をクリックします。
 - b. 変数セットの名前を入力します。
 - c. installPath 用のフィールドに、Oracle サイレント応答ファイルを格納する場所を示すフルパスを入力します。
たとえば /var/tmp/Oracle9iR2 と入力します。

注 - installPath 変数の値は、/opt などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Linux リモートエージェントで installPath 変数を opt に設定し、デフォルトのホームディレクトリ /opt/SUNWn1sps/agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは /opt/SUNWn1sps/agent/opt/ に配備されます。

- d. ORACLE_HOME_NAME 用のデフォルト値が使用されるコンポーネントがこのホスト上にすでに存在する場合は、変数 ORACLE_HOME_NAME の値を定義します。

注 - 同じ物理ホストにインストールされている2つのコンポーネントが同じ ORACLE_HOME_NAME をもつことはできません。

- e. installerHome 用のフィールドに、Oracle ソフトウェアファイルの場所を示すフルパスを入力します。
たとえば /mnt/Ora9iR2 と入力します。

installerHome 変数はソフトウェアの最上位ディレクトリを示します。このディレクトリは、Disk1 ディレクトリの上に位置する親ディレクトリです。

- f. **ORACLE_BASE** 用のフィールドに、**Oracle** ソフトウェアをインストールするルートディレクトリへのパスを入力します。
次に例を示します。 /opt/app/oracle9
- g. このホストで **Oracle** リスナーを実行する場合は、**crListener** の値を TRUE に設定します。

注-1つの物理ホストでは1つのOracleリスナーだけを実行することをお勧めします。

- h. **softGroup** 変数と **dbaGroup** 変数が正しいか確認します。
 - i. ターゲットホストで次のコマンドを入力します。 `id -a oracle`.
 - ii. **oracle** ユーザー用に作成したグループ名をメモします。
 - iii. これらのグループ名が **softGroup** または **dbaGroup** フィールドのデフォルト名と異なる場合は、これらの値を必要に応じて変更します。
- i. **oraPrflFile** が正しく設定されていることを確認します。
 - **Solaris** システムに **Oracle 10g** データベースをインストールする場合は、**oraPrflFile** 変数を **profile** に設定します。
 - **Linux** システムに **Oracle 10g** データベースをインストールする場合は、**oraPrflFile** 変数を **bash_profile** に設定します

注-**oraPrflFile** 変数の場合、環境ファイルは Bourne シェル、Korn シェル、または **bash** のプロファイルでなければなりません。C シェルはサポートされていません。

- j. **TOPLEVEL_COMPONENT** 変数が、インストールする **Oracle** のバージョンと完全に一致しているか確認します。
- k. **FROM_LOCATION_CD_LABEL** 変数が、インストールする **Oracle** ソフトウェアのディスクラベルと完全に一致しているか確認します。
- l. 必要に応じてほかの変数を変更します。
- m. 変数セットを保存します。
- n. 「**Plan Parameters**」 テーブルの **SingleInst** コンポーネント行にあるドロップダウンメニューから、上で保存した変数セットを選択します。

- ターゲットホストを選択するには、「Plans Details Run」ページの「Target Host」フィールドの次にある「Select from List」をクリックします。

注-このプラグインではこのコンポーネントをホストセットにインストールできますが、ホストセットは、シングルインスタンスインストールよりも RAC インストールの場合の方が意味があるといえます。

- 必要に応じて、「Limit Overall Running Time of Plan」および「Limit Running Time of Native Calls」フィールドの値を修正します。
デフォルトでは、プランのタイムアウト値が 30 分に設定されています。古いハードウェア上でプランを実行している場合などは、プランが完了するまでに 30 分以上必要になることもあります。タイムアウト値を増加するには、「Limit Overall Running Time of Plan」および「Limit Running Time of Native Calls」フィールドの値を増加します。
- ソフトウェアをインストールするには、「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ Oracle Database 10g 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをアンインストールする

- N1 SPS ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで Oracle Database 10g を選択します。
- 「Oracle Database 10g Common Tasks」ページで「Uninstall」をクリックします。
- 「Plan Details」ページで「run」ボタンをクリックします。
- ホストを選択します。
 - 「target host text」フィールドにホスト名を入力します。
 - 「Select From List」リンクを使用します。
 - 「Select From List」リンクをクリックします。
 - 「Current Found Hosts」リストからサーバーを選択します。
 - 「Add Hosts to Main Window」ボタンをクリックします。
- 「Cleanup Users, Install File and Start Scripts」チェックボックスを選択します。

注-Linux アンインストール用の「Cleanup Users, Install File and Start Scripts」チェックボックスが選択されていない場合、あとでデータベースをインストールするときに失敗する場合があります。「Cleanup Users, Install File and Start Scripts」と「markOnly Uninstallation」の両方のチェックボックスを選択した場合は、「markOnly Uninstallation」が優先され、クリーンアップ動作は行われません。

- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ Oracle Database 9i 用の Oracle シングルインスタンスソフトウェアをアンインストールする

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで Oracle Database 9i を選択します。
- 2 「Oracle Database 9i Common Tasks」ページで「Uninstall」をクリックします。
- 3 「plans」、「details」ページの順に選択し、「run」ボタンをクリックします。
- 4 ホストを選択します。
 - 「target host text」フィールドにホスト名を入力します。
 - 「Select From List」リンクを使用します。
 - a. 「Select From List」リンクをクリックします。
 - b. 「Current Found Hosts」リストからサーバーを選択します。
 - c. 「Add Hosts to Main Window」ボタンをクリックします。
- 5 「Cleanup Users, Install File and Start Scripts」チェックボックスを選択します。

注-Linux アンインストール用の「Cleanup Users, Install File and Start Scripts」チェックボックスが選択されていない場合、あとでデータベースをインストールするときに失敗する場合があります。「Cleanup Users, Install File and Start Scripts」と「markOnly Uninstallation」の両方のチェックボックスを選択した場合は、「markOnly Uninstallation」が優先され、クリーンアップ動作は行われません。

- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

データベースの作成と使用

データベースについて

Oracle データベースには3つの種類があります。

- 汎用目的 - 多様なトランザクションが混在した汎用的なデータベース
- データウェアハウス - 長時間を要する非定型的な照会に最適なデータベース
- トランザクション処理 - 多数の短いトランザクションや定型的な照会に使用するトランザクション指向のデータベース

▼ Oracle 9i データベースを作成する

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで **Oracle Database 9i** を選択します。
- 2 「**Oracle Database 9i Common Tasks**」ページで「**Create**」をクリックします。
- 3 「**Plans Details**」ページで「**Run**」をクリックします。
- 4 「**Plan Details Run**」ページで、データベースを作成するターゲットホストを選択します。
- 5 「**Plan Details Run**」ページでプランの変数情報を入力します。
 - a. 必要な場合は **Oracle Service** の名前を変更します。
 - b. このサービスをデフォルトサービスにする場合は、チェックボックスをクリックします。
 - c. このデータベースに適用するデータベーステンプレートの名前を入力します。

デフォルトのデータベーステンプレートは **General_Purpose** です。このテンプレートは、データベースが、複数のトランザクションタイプに対して使用されることを意味します。そのほかのテンプレートとしては次のものがあります。

 - **Data_Warehouse** - 長時間を要する非定型的な照会に最適なデータベース
 - **Transaction_Processing** - 多数の短いトランザクションや定型的な照会に使用するトランザクション指向のデータベース
 - d. 必要な場合は、データベースに使用する文字セットを変更します。

デフォルトの文字セットは **Western European (ISO 8859)** です。Oracle での文字セットについては、Oracle のマニュアルを参照してください。

- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ Oracle 10g データベースを作成する

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで Oracle Database 10g を選択します。
- 2 「Oracle Database 10g Common Tasks」ページで「Create」をクリックします。
- 3 「Plans Details」ページで「Run」をクリックします。
- 4 「Plan Details Run」ページで、データベースを作成するターゲットホストを選択します。
- 5 「Plan Details Run」ページでプランの変数情報を入力します。
 - a. 必要な場合は Oracle Service の名前を変更します。
 - b. このサービスをデフォルトサービスにする場合は、チェックボックスをクリックします。
 - c. このデータベースに適用するデータベーステンプレートの名前を入力します。

デフォルトのデータベーステンプレートは General_Purpose です。このテンプレートは、データベースが、複数のトランザクションタイプに対して使用されることを意味します。そのほかのテンプレートとしては次のものがあります。

 - Data_Warehouse - 長時間を要する非定型的な照会に最適なデータベース
 - Transaction_Processing - 多数の短いトランザクションや定型的な照会に使用するトランザクション指向のデータベース
 - d. このデータベースに対して使用するストレージタイプを選択します。
 - デフォルトでは、ストレージタイプは FS (ファイルシステム) です。
 - ASM (Automatic Storage Management) では、高可用性 (RAID) ソリューションがサポートされます。

そのほかの情報や、そのほかのユーザー設定を実行する必要がある場合は、Oracle のマニュアルを参照してください。

ASM ストレージタイプを使用する場合は、4つのフィールドに追加情報を指定する必要があります。

 - i. ASM 用に使用する一連の raw ディスクを入力します。
 - ii. 採用する ASM 冗長性タイプを選択します。

- iii. ASM 用に使用するディスクグループの名前を入力します。
- iv. ASM 管理用に使用するパスワードを入力します。
- RAW では、どのファイルシステムユーティリティーもサポートされません。
- e. 会社全体をローカルの Web サイトから管理するか、中央の Web サイトから管理するかを選択します。
中央の Web サイトから一元的に管理する場合は、URL を指定します。

注 - 一元的な管理を行う場合は、データベースを作成する前に、管理エージェントをターゲットにインストールする必要があります。ここでローカル管理を選択しても、あとで一元的な管理に変更することができます。

- f. 必要な場合は、データベースに使用する文字セットを変更します。
デフォルトの文字セットは Western European (ISO 8859) です。Oracle での文字セットについては、Oracle のマニュアルを参照してください。
 - g. (省略可能) Flash バックアップを有効にする場合は、バックアップディレクトリへのパスを入力します。
- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

同じホストで Oracle 9i と 10g を使用する方法

ソフトウェアのインストールとデータベースの作成が終わったら、ソフトウェアの両バージョンを同じホストで実行するために、Oracle ネットサービス構成を結合する必要があります。基本的には、ネットサービス名とリスナー情報をホスト上の 1 つのリスナーとして結合する必要があります。詳細は、Oracle のマニュアルを参照してください。

データベースの管理

Oracle データベースプラグインでは、Oracle データベースに対して次の管理作業を実行できます。

- データベースを起動する。
- データベースを停止する。
- データベースのインスタンスが現在実行中であることを確認する。
- Oracle データベースソフトウェアがインストールされているすべてのリモートエージェントを表示する。

▼ Oracle データベースを起動する

ここでは、Oracle データベースプラグインを使用して Oracle データベースの単一インスタンスを起動または再起動する手順について説明します。

- 1 **N1 SPS** ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、対象となる **Oracle** データベースエントリを選択します。
- 2 「**Oracle Database Common Tasks**」ページで「**Start**」をクリックします。
- 3 「**Plans Details**」ページで「**Run**」をクリックします。
- 4 「**Plan Details Run**」ページでプランの変数情報を入力します。
 - a. 「**Plan Parameters**」テーブルの該当するリンクをクリックし、バージョン設定を設定します。
 - b. 「**Plan Parameters**」テーブルの該当するリンクをクリックし、変数設定を設定します。
 - c. データベースを起動する、ターゲットホストを選択します。
 - d. 「**Plan Variables**」セクションで、単一インスタンスコンポーネントのインストールパスを設定します。
 - e. 「**Plan Variables**」セクションで、ターゲットホストで起動する **Oracle** サービスの名前を設定します。
 - f. データベースを再起動する場合は、再起動前にデータベースを停止するために使用するシャットダウンモードを設定します。
 - g. データベースで **ASM** が使用されている場合は、「**Database uses Automatic Storage Management**」の横のボックスをチェックします。
 - h. データベースが起動済みの場合は、「**Restart, if already running**」の横のボックスをチェックします。
- 5 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ Oracle データベースを停止する

ここでは、Oracle データベースプラグインを使用して Oracle データベースの単一インスタンスを停止する手順について説明します。

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、対象となる **Oracle** データベースエントリを選択します。
- 2 「**Oracle Database Common Tasks**」ページで「**Stop**」をクリックします。
- 3 「**Plans Details**」ページで「**Run**」をクリックします。
- 4 「**Plan Details Run**」ページでプランの変数情報を入力します。
 - a. 「**Plan Parameters**」テーブルの該当するリンクをクリックし、バージョン設定を設定します。
 - b. 「**Plan Parameters**」テーブルの該当するリンクをクリックし、変数設定を設定します。
 - c. データベースを停止する、ターゲットホストを選択します。
 - d. 「**Plan Variables**」セクションで、単一インスタンスコンポーネントのインストールパスを設定します。
 - e. 「**Plan Variables**」セクションで、ターゲットホストで停止する **Oracle** サービスの名前を設定します。
 - f. データベースを停止するために使用するシャットダウンモードを設定します。
 - g. データベースで **ASM** が使用されている場合は、「**Stop Automatic Storage Management**」の横のボックスをチェックします。
- 5 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ Oracle データベースの実行を確認する

ここでは、Oracle データベースプラグインを使用して Oracle データベースの単一インスタンスが現在実行されていることを確認する手順について説明します。

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、対象となる **Oracle** データベースエントリを選択します。
- 2 「**Oracle Database Common Tasks**」ページで「**Verify**」をクリックします。
- 3 「**Plans Details**」ページで「**Run**」をクリックします。

- 4 「Plan Details Run」 ページでプランの変数情報を入力します。
 - a. 「Plan Parameters」 テーブルの該当するリンクをクリックし、バージョン設定を設定します。
 - b. 「Plan Parameters」 テーブルの該当するリンクをクリックし、変数設定を設定します。
 - c. データベースが実行されていることを確認するターゲットホストを選択します。
 - d. 「Plan Variables」 セクションで、単一インスタンスコンポーネントのインストールパスを設定します。
 - e. 「Plan Variables」 セクションで、ターゲットホストで停止する Oracle サービスの名前を設定します。
- 5 「Run Plan (includes preflight)」 をクリックします。
- 6 「stdout」 リンクをクリックし、Oracle データベースが実行中かどうか確認します。データベースのステータスが「stdout」 ウィンドウに表示されます。
 - データベースが実行中の場合は、次のようなメッセージが表示されます。

```
Total System Global Area 320308312 bytes
Fixed Size                730200 bytes
Variable Size             285212672 bytes
Database Buffers         33554432 bytes
Redo Buffers              811008 bytes
```
 - データベースが実行されていない場合は、次のようなメッセージが表示されます。

```
ORA-01034: ORACLE not available
```

注意事項 Oracle データベースが実行されていない場合は、データベースを再起動してください。詳細については、40 ページの「Oracle データベースを起動する」を参照してください。

▼ Oracle データベースのリモートエージェントに関する情報を表示する

Oracle データベースプラグインを使用すると、Oracle データベースのリモートエージェントに関する情報を表示できます。この情報を表示するには、次の手順に従ってください。

- 1 N1 SPS ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、対象となる Oracle データベースエントリを選択します。

2 「Oracle Database Common Tasks」 ページで「View All」をクリックします。

「Components Details Where Installed」ページが表示されます。「Hosts Where Installed」テーブルに、Oracle データベースソフトウェアがインストールしたリモートエージェントの一覧が表示されます。「Hosts Where Installed」テーブルには、各リモートエージェントに関して次の情報が表示されます。

- リモートエージェントのホスト名
- そのリモートエージェントのインストールに使用された Oracle データベースコンポーネントのインストールパス
- データベースのインストールに使用された変数設定
- データベースのインストールに使用されたコンポーネントのバージョン
- データベースがインストールされた日時
- データベースのインストールに使用されたプラン
- データベースをインストールしたユーザーのユーザー名

「Hosts Where Installed」テーブルの「Actions」列を使用すると、各ホストの詳細情報を表示できます。

- 各ホストのホストタイプ、およびホストセットと各ホストに関連するほかのホストを表示するには、「Details」リンクをクリックします。
- コンポーネントの依存性など、各ホストにインストールされたコンポーネントに関する情報を表示するには、「Relationships」リンクをクリックします。
- このコンポーネントのプラン実行履歴を表示するには、「Results」リンクをクリックします。

コンポーネント

Oracle データベースプラグインには2つのコンポーネントが含まれています。

- OraSpt
- SingleInst

OraSpt コンポーネント

OraSpt コンポーネントには、Oracle データベース用のサポートファイルがあります。

SingleInst コンポーネント

SingleInst コンポーネントは、シングルノード Oracle データベースソフトウェア用のファイルをカプセル化し、配備します。

障害追跡

問題: データベースソフトウェアのインストール時にエラーが起こった。

対処方法: `installerHome` 変数の値をチェックしてください。この変数は、`installerHome` の値にある種の情報を自動的に付加します。たとえば、Oracle ソフトウェアがディレクトリ `/appsrc/Disk1/runInstaller` にある場合は、`installerHome` 変数に `/appsrc` だけを設定します。必要に応じてプラグインは、`installerHome` 変数に定義されているパスに `Disk1/...` を付加します。

問題: コンポーネントの配備時にエラーが起こった。

対処方法: 次の手順を実行します。

1. `installPath` か `ORACLE_BASE` 変数で指定したパスに配備されているファイルを削除します。
2. Linux システムの場合は `/etc` ディレクトリにあるファイル `oraInst.loc` を、Solaris システムの場合は `/var/opt/oracle` ディレクトリにあるファイル `oraInst.loc` をそれぞれ削除します。
3. `oracle` ユーザーが所有するプロセスを終了させます。
4. 配備を再度行います。

索引

数字・記号

10g ソフトウェアのインストール, 27-31

10g データベースの作成, 38-39

9i ソフトウェアのインストール, 31-35

9i データベースの作成, 37-38

A

ASM ストレージ, 38

D

dba グループ, 26

J

JAR ファイル, 15-18

Java アーカイブ, 「JAR file」を参照

L

Linux

共有メモリーの要件, 22

セマフォの要件, 22

O

oinstall グループ, 26

Oracle

サポートされるオペレーティングシステム, 10
マニュアル, 11

oracle ユーザー, 26

OraSpt コンポーネント, 26

R

RAC は非サポート, 25

RA に関する要件, 20-22

RA 要件, 21-22

S

Solaris

共有メモリーの要件, 22

セマフォの要件, 22

パッチ, 23

SQL*plus, 27

X

Xvfb バイナリ, Solaris リモートエージェントの要件, 21-22

き

共有メモリーの要件

Linux の, 22

Solaris の, 22

く

グループ

dba, 26

oinstall, 26

さ

サポートされる Oracle のバージョン, 10

サポートされるソフトウェア構成, 10

し

シングルインスタンスソフトウェア

10g 用のインストール, 27-31

9i 用のインストール, 31-35

せ

セッション変数, 27

セマフォの要件

Linux の, 22

Solaris の, 22

て

データベース

10g 用の作成, 38-39

9i 用の作成, 37-38

トランザクショングループ, 37

は

配備サーバーの要件, 10

パスワード, 27

ふ

プラグイン

インポート, 18-19

構成, 20-23

内容, 10

配備サーバーの要件, 10

目的, 9

プラグインのインポート, 18-19

プラグインの構成, 20-23

プラグインファイル

インポート, 18-19

の場所, 15-18

プロセス, 25-26

へ

変数

syspass, 27

セッション, 27

ゆ

ユーザー

oracle, 26

sys, 27

システム, 27

よ

要件

共有メモリーの, 22

セマフォの, 22

リモートエージェントに関する, 20-22

リモートエージェントの, 21-22